

高僧の墓

「さんぼういんほうきまいんとう三宝院宝篋印塔」は、真言宗醍醐派総本山醍醐寺境内の中の菩提寺と呼ばれる所にあります。菩提寺は醍醐寺第65代座主けんしゅん賢俊が14世紀前半に再興し、住房としたところからです。その東端は廟所となっており、宝篋印塔・五輪塔が立ち並び、室町時代以降の歴代門跡を祀っています。この中にある「三宝院宝篋印塔」は、鎌倉時代末期の様式を伝えるもので、寺伝によると、この宝篋印塔は賢俊の菩提を弔うために建立されたとされています。

宝篋印塔が置かれた基壇は二段となっており、一段目の壇の上には宝珠を配した板石が各辺に3枚ずつ据えられ、二段目はかざらいし葛石で囲んだ壇となっています。その上に地覆石、上下2石からなる台座を乗せ、宝篋印塔が据えられています。発掘調査をしたところ、宝篋印塔の真下は上下三層となっており、最下層で甕の抜き取り跡、中・上層ではそれぞれ人骨を納めた信楽壺と常滑壺がありました。宝篋印塔の四周では、基壇の板石下で各辺に3基ずつ計12基、基壇の外側に3基ずつ計12基の埋葬施設が見つかりました。埋葬施設は、まず、中央1か所と基壇外側12か所で大甕が据えられ、骨が納められます。次いで、それらの甕・骨が抜き取られ、内側に甕・骨が移されて、中央に信楽壺が納められます。最後に現状の基壇が、甕列の上に設けられ、塔下に信楽壺が置かれたことがわかりました。歴代の醍醐寺の僧侶がこの宝篋印塔に祀られていたのかもしれませんが。



三宝院宝篋印塔（修理前）

（増田孝彦）